

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 大村しげの都心居住

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 角野, 幸博 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001444">https://doi.org/10.15021/00001444</a>

## 2. 大村しげの都心居住

角野 幸博

### 1 はじめに

本論文は、大村しげを縦糸に、高度経済成長期から安定成長期の京都という都市システムを横糸にして、都心居住について考察を行うものである。

近年、都心の地価の鎮静化や高齢化社会の到来をふまえて、職住近接やアフターファイブの楽しみに着目した都心居住の魅力が再評価されている。東京や大阪などの大都市では、商業業務地への民間分譲マンションの建設が相次ぎ、一方で郊外住宅地では人口減少が進行している。

京都も例外ではない。1970年代半ば以降、都心部の土地利用転換がすすみ、分譲マンションが立地し始めた。バブル経済期にはさらに土地投機がすすみ、バブル経済終焉以降も様々な要因で建設が進んでいる。

本来は住商（住工）併用住宅であった京町家が密集する都心部では、数百年間に渡って都心居住のシステムが整備されてきたものの、都心にたつ中高層マンションは、京町家が培ってきた都心居住システムとは無縁のものになりつつある。日照通風などの相隣環境への配慮、街並み景観への影響、近隣コミュニティからの断絶など、いくつもの問題をかかえているからである。

京都に限らず持続可能な都心居住のシステムを構築するためには、単に都心にマンションを建設するだけでなく、そこでの暮らし方についてのきめ細かいシステム作りが不可欠と考える。大村しげの暮らしとモノが、そのためのヒントにならないだろうか。

彼女の住所は、中京区寺町姉小路東入ル下本能寺前町。バリ島に転居するまでの約75年間、彼女は間違いなく都心居住を実践してきた。そしてその実態は彼女の書き物に、断片的にはあるが記されている。多くの書き物や残されたモノから、彼女の都心居住の全体像を紡ぎだしてみたい。もちろんそれは都心居住の一般像ではなく、大村しげという、一生を独身で過ごしたモノ書きの都心居住像である。長い歴史と観光都市としての側面をもち、独特の近隣コミュニティを育んできた京都という特殊性も大きい。京町家（あるいは長屋）という装置の独自性もある。しかし京都の長屋暮らしが、都心居住のもっともわかりやすい事例のひとつである事は間違いない。大村しげの特殊性から都心居住の本質を浮かび上がらせてみたい。

本題に入る前に、彼女の都心居住を理解するための特徴を整理しておこう。

- ① 借家である事。1926（昭和元）年、本能寺が無縁仏の墓地を改葬してそこに15軒長屋を建設した。彼女がここに暮らし始めたのは1935（昭和10）年である。
- ② ほとんどの期間が単身女性の都心居住であった事。1938（昭和13）年から1960（昭和35）年まで、彼女は両親と同居していたし（但し父親は1957年死亡）、女子学生を下宿させてはいたものの、生涯独身であったため、両親の影を除くと、子供や夫に影響されず純粹に個人の暮らしが見える。
- ③ 様々なモノを保管していた事。一定期間存在していたが消えたモノ、動いたモノも無数にあるはずではあるが、日常生活や仕事で入手したモノが、彼女の価値観のもとに残されている。単身であるがゆえに、鈴木靖峯氏の持ち物を除いて自分のモノだけにかこまれていた。住まいの中に無いモノは都市的サービスとして周囲から調達した。「傘なしで大丸に行ける」<sup>1)</sup>ほど便利であった。パリ島への移住はこうしたモノとの訣別であったのかもしれない。
- ④ 著述業を生業とした事。京都を題材とし、マスコミとの関わりが深かったために、日常生活と取材との区別がつきにくい、いいかえればオンタイムとオフタイムの区別がない人物であった。また夜に執筆する事が多いため朝起きるのが遅く、単身でもあったために隣近所とのつきあい方にも特徴があった。

以上の背景のなかで、彼女は独自の「大村しげ的宇宙」を生き、記述してきた。本論では、彼女の著作に登場する京都市内各所の記述や、自宅に残された様々なモノに刻印された「場所の記憶」を主な手がかりにし、同時代の京都市内の社会状況と照らし合わせながら、大村しげの都心居住像を探る事にする。

## 2 著述テーマの変化と京都の変容

### 2.1 京暮らしへの関心

1950年代の彼女の著作と活動は、生活者としての立場を意識したうえで、選挙や地方行政への意見・要望を述べるものが多い<sup>2)</sup>。「自立する近代女性」ともいうべき気負いが感じられる。1957（昭和32）年に西陣青年の家に勤務するようになってからも、社会批評や社会への提言といったニュアンスを感じることができる<sup>3)</sup>。この間、青年たちのリーダー的存在になっていたことも背景にあるものと思われる。この頃までは都市一般や社会一般への関心は高いものの、「京都」の固有性への意識はまだ希薄であった。

京都を京都として意識し始めたのは、1960年代である。京都タワー建設問題への反対運動（朝日新聞1964.7.他）に代表される都市空間への意思表示などは、1950年代のスタンスと相通じるところがある。1963（昭和38）年1月からは朝日新聞にお

ばんざいの記述が始まる。他にも「切りづけ トントン漬物をきざむ音（『浪花のれん 36号』株式会社産報, 1963.5）」のように、料理に関する記述が目立つようになる。おばんざいは朝日新聞に連載の後、1966（昭和 41）年に単行本化された<sup>4)</sup>。これ以降食べ物中心の著述が急増し、1970 年代におばんざいがブームとなる。あわせて 1970 年代にはおばんざい以外の関西の料理や京の伝統工芸に関する著述が増加する<sup>5)</sup>。

「京暮らし」への意識は、このような流れと並行する。1968（昭和 43）年 9 月に「京のまち」（西陣だより 197号）を執筆した後、翌 69 年には『西陣クラブ』に「京の暮し」が 1 年間連載された。さらに 1973（昭和 48）年 4 月からは『暮らしの手帳』に「京暮らし」の連載が始まった。1970 年代後半には京都新聞の広報誌『京のくらし』に連載があるものの、その中身は「私が選んだこの店京の味」という京都の老舗料亭を紹介するものであり、基本は食を中心とするものであった。

住様式に踏み込んだ京暮らしの記述は、「感覚支える暮らし 京文化の厚みがにじむ」<sup>6)</sup>、「新春対談 京都に学ぶ手づくりの暮らし」<sup>7)</sup>、「京の町と暮しと」<sup>8)</sup>や「京都の夏のくらしぶり」<sup>9)</sup>など 1980 年代初頭に目立つようになる。さらに、ことば<sup>10)</sup>、いけず<sup>11)</sup>、しまつ<sup>12)</sup>、あいさつ<sup>13)</sup>など、他者からは京都独自の特徴をもつと思われがちなテーマへの著述が現れる。ただしこれは、マスコミからの依頼に応えてのものではあるが。もちろん、おばんざいをはじめとする食文化への記述が減ることはなく、食文化こそが、彼女にとっての生活文化イメージの中核をなすものであり、マスコミもそのことを期待していた。

1980 年代後半から 90 年代になると、京の暮らし全般についての著述<sup>14)</sup>や、海外との比較<sup>15)</sup>などの著述が現れる。京暮らしについてのまとめた記述としては『京暮らし』（1987）<sup>16)</sup>、『ほっこり京ぐらし』（1997）<sup>17)</sup>をあげることができる。おばんざいの専門家大村しげが、京の生活文化全般に関する専門家と評価されるようになり、また彼女の行動圏が拡大したこと、晩年が近づき自らの集大成をはかったことなどが推測される。

## 2.2 京都の変容

大村しげが本格的に執筆を開始し、京の都心居住を謳歌した 1950 年代から 1990 年代にかけて、京都の街はどのように変貌していったのだろうか。彼女の関心事やライフスタイルとも密接な関係があるに違いない。表 1 はその間における京都市内及び社会の主な出来事を年表としてまとめたものである。

1950（昭和 25）年、京都国際観光都市建設法が公布され、市は都市計画・文化・観光に重点をおく姿勢を明確にした。堀川通の貫通（1951）、三代目京都駅竣工（1952）、京都国際文化観光都市建設計画最終案決議（1954）など、戦後京都の建設が本格化した時期であり、この時期に地方行政や国政に対して積極的に意見発表を行っ

表 1 1950 年代以降の京都の主な出来事

年代	主 な 出 来 事
1950	<p>50 京都市長に高山義三就任。4 月には嵯川虎三が京都府知事に初当選。 京都国際文化観光都市建設法案，衆議院で可決される。</p> <p>51 堀川通七条一上賀茂間の道路が貫通する。</p> <p>52 三代目京都駅が竣工する。</p> <p>54 市，京都国際文化観光都市建設計画の最終案を決議する。 NHK 大阪放送局，テレビの本放送を開始する。京都でもテレビ放送が開始。</p> <p>56 市の観光税計画に対し，社寺，拝観ストライキを行う。 市会において，美観と風致の維持のため，屋外広告物条例が議決される。</p> <p>58 市電今出川線が北野白梅町まで延伸し，大正 14 年以後計画の路線網が完成。</p>
1960	<p>62 トロリーバス梅津—松尾間が延長される。</p> <p>63 阪急大宮—河原町間地下鉄運転が開始される。</p> <p>64 東京オリンピックが開催される。10 月，新幹線の営業を開始。 京都タワービルの竣工式が行われる。</p> <p>66 古都保存法公布される。</p>
1970	<p>70 日本万国博覧会が大阪で開催される。 国鉄がディスカバージャパンキャンペーン開始。</p> <p>72 京都市景観条例公布。</p> <p>76 産寧坂，祇園地区，国指定重要伝統的建造物群保存地区に指定される。</p> <p>78 国鉄いい日旅立ちキャンペーン。 市電は全廃される。</p> <p>79 嵯峨鳥居本地区，国指定重要伝統的建造物群保存地区に指定される。</p>
1980	<p>81 地下鉄烏丸線開業。</p> <p>85 古都保存協力税実施，拝観停止寺院相次ぐ。</p> <p>88 古都保存協力税廃止。 上賀茂地区，国指定重要伝統的建造物群保存地区に指定される。</p> <p>89 京阪電気鉄道・鴨東線（三条—出町柳駅）営業運転開始。</p>
1990	<p>90 地下鉄烏丸線，北大路—北山間開通。</p> <p>91 京都仏教会，京都ホテル改築計画に反発し，加盟寺院で拝観拒否を宣言。</p> <p>94 総合設計制度による地上 16 階建ての京都ホテル完成。 平安建都 1200 年記念協会主催「記念祝典」。 ユネスコ第 18 回世界遺産委員会で，17 社寺・城からなる「古都京都の文化財」（京都市，宇治市，大津市）を「世界文化遺産」に登録することが決定。</p> <p>97 地下鉄烏丸線延伸区間（北山—国際会館）開業。 JR 京都駅ビルが営業開始。 地下鉄東西線開業。</p> <p>98 京都市，町家の悉皆調査行う。市内中心部で約 28000 軒残っていることが判明。</p>

高橋康夫・中川理編『京・まちづくり史』（昭和堂 2003）等より筆者が作成

たのが，文筆家としての彼女のスタートであった。

1950 年代後半から 60 年代前半にかけて，公共交通網の整備がすすむ。1958（昭和 33）年，市電今出川線が白梅町に延伸し，市電網が完成。1962（昭和 37）年にはトロリーバス梅津—松尾間が延伸。1963（昭和 38）年には阪急電車が地下で四条河原町に乘入れる。都心居住のための交通基盤がこうして整っていった。

1964（昭和 39）年に京都タワービルが竣工。1963～1964 年春にかけて激しい反対

運動が起こり、彼女も京都タワー建設反対の署名運動を行ったものの、それ以降は50年代や60年代前半のような社会批評的記述や、まちづくりに対する直接的な意見表明はあまりみあたらない。

京都ではその後景観に対する社会的関心が急速に高まる。古都保存法公布（1966・昭和41年）、京都市景観条例公布（1972・昭和47年）などの流れを受け、1976（昭和51）年には祇園新橋、産寧坂が最初の重要伝統的建造物群保存地区に指定された。以降町並み保存の動きが具体的に進み始めるが、これは市街地の景観が急速に変容し始めたことの証拠でもある。この間しげは、おぼんざいや京料理などに関する著作を次々と発表している。

1970（昭和45）年秋、当時の国鉄は、「ディスカバージャパン」<sup>18</sup> キャンペーンを開始した。これに反応して新しい女性誌が観光情報を続々と掲載するようになり、京都特集が頻繁に組まれるようになった。この傾向は1978（昭和53）年に始まった「いい日旅立ち」<sup>19</sup> キャンペーンでさらに増幅される。社寺仏閣はもとより伝統工芸や隠れた逸品などへの関心が高まったのもこの頃である。おぼんざいや手づくりの店を紹介したしげの著作は、こうした社会的背景によっていっそう注目されることになった。

市電が全廃された1978（昭和53）年、しげは『京都の市電』（立風書房）に「電車の窓から」というエッセイを寄せ、廃止を惜しんでいる。しかし1981（昭和56）年には地下鉄烏丸線が開通し、路面電車を中心とした公共交通体系は消滅し、街の風景も大きく変わるようになった。

内外からの観光客の増加に対して、1985（昭和60）年、京都市は古都保存協力税（通称古都税）を施行するが、社寺仏閣から猛烈な反対を受け、3年後には廃止する。1990年代に入ると、建都1200年記念イベント（1994・平成6年）の開催や、17社寺からなる「古都京都の文化財」の世界文化遺産登録などが話題になる。また京都ホテル（1994年完成）や京都駅ビル（1997年完成）の建て替え問題が顕在化し、景観についての議論が沸騰するが、しげは伝統的な生活に関する著述はあるものの、社会問題化した観光や景観についての議論にはあまり組していない。彼女が脳梗塞で倒れたのも1994年であった。

## 2.3 町家の変容

しげが居住していたのは本能寺の15軒長屋の1軒である。

長屋を含めた木造瓦葺の市街地建築は、しげが有名になっていた1970年代には多数存在していた。町家・長屋を特定した統計資料は見当たらないが、京都市全体で1973（昭和48）年の居住世帯のある住宅総数が376,000戸、このうち都心4区（上京、中京、下京、東山）には9万戸程度あったと考えられる。同年の市全体の木造住宅比率は67.7%であったから、少なく見積もっても都心4区で6万戸以上の木造住宅があっ

た。1993（平成5）年になると都心4区で居住世帯のある住宅数が121,420戸、市全体の木造住宅比率は39%になっているので、木造住宅は47,000戸程度となった。木造住宅のすべてが京町屋というわけではないが、都心4区では20年の間に約50%に減少したということができる。

重要伝統的建造物群保存地区の指定前後から、専門家の間では町家への関心が高まっていた。地区指定には専門家によるきめ細かい実態調査が必要なことは言うまでもないが、さらに上田篤らは、建築空間としての町家の魅力に加えて、地域コミュニティとの関連や、ミセノマからオクハナレにいたる空間分節とその機能のおよび精神的意味について実証的な考察を行っている<sup>20)</sup>。しかし一般市街地では、その形状からセンベイビルやペンシルビルと揶揄される中高層建築が、うなぎの寝床状の細長い敷地いっぱいにならたてられていった。しげが京都へのこだわりを強めていった時期は、町家が急減し京都の町並み景観が急変していた時期と完全に一致しているのである。

京町家に特定して1998（平成10）年に京都市が行った調査によると<sup>21)</sup>、表構えなどが改造されたものを含めて、都心4区で約28,000戸の京町家が残存している。これは対象地区にあるすべての宅地の約45%を占め、敷地面積割合では約32%を占める。ずいぶん減少しているとはいえるものの、都心にまだ相当数残っていることがわかる。

とくに近年は、飲食店やギャラリー、小売店などに京町家を活用する例が増加し、その魅力が再評価されつつある。京町家の減少や再生に、しげが直接言及している資料は発見できないが、おばんざいを売り物にする飲食店が目立つこと、手づくりの店への関心が高まりこれを売り物にする店舗が増えたことなど、しげとの関わりを感じさせる現象が、町家の変化にも散見される。

### 3 都心居住の実態

#### 3.1 意識された場所、無意識の場所、実際の生活行動

大村しげは京都の生活文化に関する著述家で、長屋住まいの単身者である。このことが、彼女と都市空間とのかかわりを独特のものにしている。

著作物に紹介されている店舗や社寺仏閣などは、まさに個々の場所を「紹介する」ことを目的に記述されている。もちろん彼女はそれぞれの場所をよく知っていたに違いないが、日常的に本当に親しんでいたのか、行きつけの場所だったのかはわからない。それらの場所は、京の名所として読者に誇りを持って伝えたい、ありていに言えば「自慢したい」場所として、意識の上に明確に現れている場所である。

図1および表2は、『ほっこり京ぐらし』<sup>22)</sup>に紹介された場所を地図上に示したもの

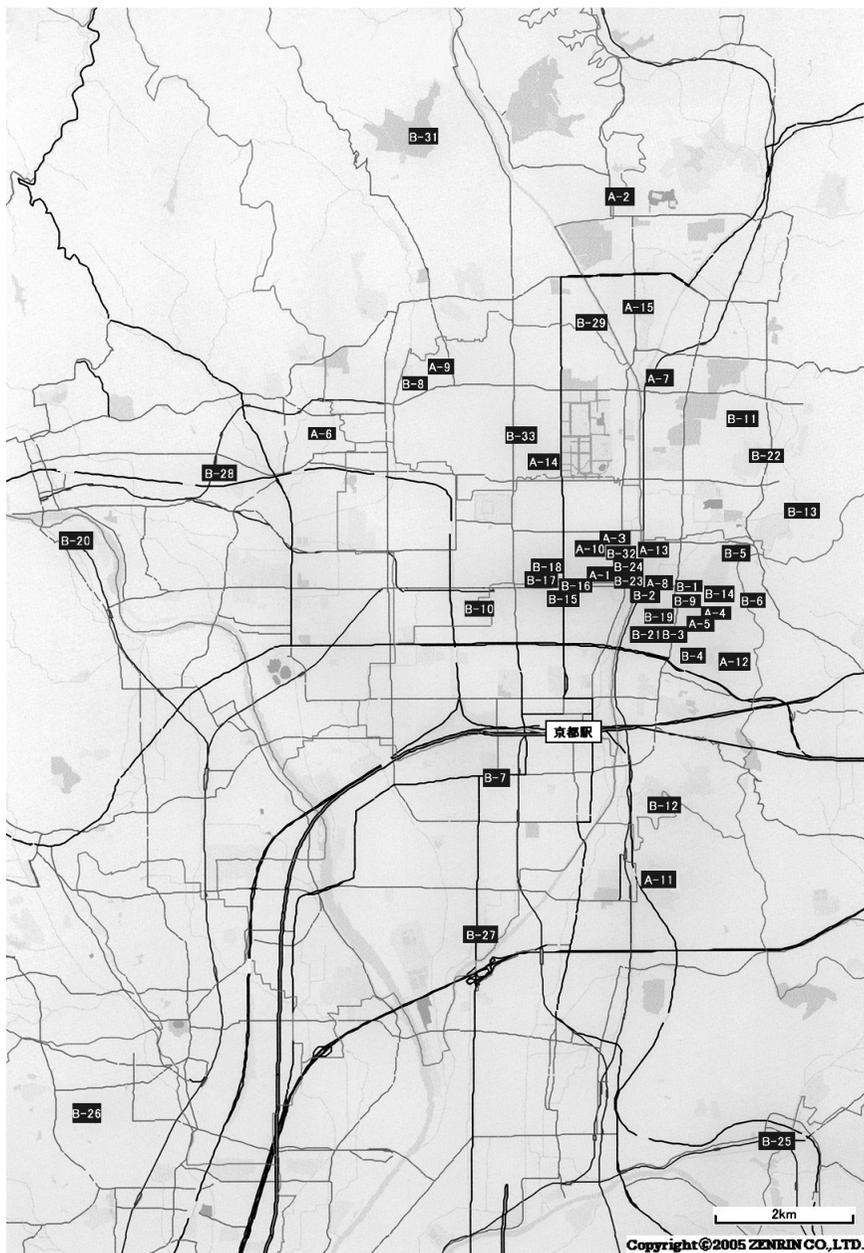


図1 『ほっこり京ぐらし』に掲載されたしげの行動先  
大村しげ『ほっこり京ぐらし』（淡交社 1997）・ゼンリン電子地図帳より筆者が作成

表2 『ほっこり京ぐらし』に記載されたしげの行動

番号	場所	行動
A-1	錦小路通	買い物
A-2	鞍馬街道	散歩, 買い物
A-3	寺町通	家
A-4	高台寺	散歩
A-5	下河原通	散歩
A-6	妙心寺	散歩
A-7	出町柳	乗り換え
A-8	繩手通	学校
A-9	西陣	散歩
A-10	三条通	散歩
A-11	伏見稲荷大社	お詣り
A-12	清水寺	お詣り
A-13	三条大橋西詰	買い物
A-14	府庁付近	買い物
A-15	下鴨本通近辺	買い物
B-1	八坂神社	祇園祭
B-2	四条大橋	神輿洗い
B-3	珍皇寺	おしよらいさん
B-4	五条坂・安祥院	陶器祭り・お詣り
B-5	栗田口	マツタケの出盛り
B-6	將軍塚	紅葉, 花見
B-7	東寺	弘法さんの縁日
B-8	北野天満宮	お詣り
B-9	祇園	おけら詣り
B-10	壬生寺	お年越し(節分)
B-11	吉田神社	お年越し(節分)
B-12	東福寺	紅葉
B-13	永観堂	紅葉
B-14	円山公園	花見
B-15	鈴町	祇園祭
B-16	占出山	お詣り
B-17	叡天神山	お詣り
B-18	南観音山	観音さんお祭り
B-19	建仁寺町	十日戎
B-20	法輪寺	お詣り
B-21	寿延寺	お詣り
B-22	真如堂阿弥陀如来	お詣り
B-23	新京極の安養寺	お詣り
B-24	新京極の誓願寺	お詣り
B-25	六地藏の大善寺	お詣り
B-26	桂の光明寺	お詣り
B-27	上鳥羽の浄禅寺	お詣り
B-28	常磐の源光寺	お詣り
B-29	出雲路の上善寺	お詣り
B-30	山科四宮の徳林庵	お詣り
B-31	西賀茂の正伝寺	月見
B-32	天性寺	おしたけ(お火焚)
B-33	猪熊通	つきあい

A…日常生活行動：買い物, 学校, つきあい, 信仰地

B…京のお店紹介, 年中行事紹介, 観光ガイド

大村しげ『ほっこり京ぐらし』(淡交社 1997) より筆者が作成  
ただし B-30 は地図の範囲外

とその一覧である。図中アルファベットのBで示したところは社寺仏閣と鉦町など伝統的な街の一角であるが、年中行事などの行動と関連付けて紹介されている。

たとえば、安祥院、永観堂、清水寺、真如堂、安養寺、誓願寺は「洛陽六阿弥陀巡拝」の対象寺院であり、その多くは堀川通以東、御池通と五条通の間に集中している。それ以外の場所は、町なかというよりも山麓部に点在している。

また図中アルファベットのAで示した場所は、買物、散歩など彼女の日常生活により密着した場所として紹介されている。社寺仏閣も少数含まれるが、散歩目的や定期的に参詣しているところである。本文中にも、京都にはお参りしようと思えば行ける所がいくらかでもあると述べており、年中行事のたびに参詣していたことがうかがわれる。Bの分類個所と同様の分布を示しているが、自宅から徒歩では行きづらい距離のところも多く、積極的に動き回っていた様子がわかる。

図2および表3は、『京の手づくり』<sup>23)</sup>に紹介された手づくりの工芸品や食品の店を示したものである。必ずしも観光客によく知られた有名店ではなく、うずもれた名店を発掘しようという意図がうかがわれる。やはり居住地の近隣が多いが、西陣や上賀茂など市街地の北西部での分布が目立つ。これは彼女が、西陣青年の家に通っていたことから、土地勘が働いたのではないと思われる。

図3および表4は、彼女が日常の買物でも親しんでいた錦市場で、おばんざいの素材の店として紹介された店舗である<sup>24)</sup>。高倉通から御幸町通までの間にほぼ均等に分布しており、その大半は今も営業を続けている。

以上の、いわば意識された場所以外に、彼女の保管するモノには様々な住所や所在地が記されている。これらは彼女の生活行動のネットワークを示す証拠として非常に興味深い。図4および表5はしげが保存していた社寺仏閣などの拝観券である。東山山麓、北野、嵯峨野など有名観光寺院が立地する界隈のものが多く、本当の都心に位置する社寺のものは少ない。都心に立地する社寺は、しげにとってあまりに身近であったために、拝観券を保存するという発想が浮かばなかったのだろうか。

他には山科や大原野など京都近郊の社寺の拝観券が残されている。さらにこれ以外に、大原美術館（倉敷）、姫路城、国立西洋美術館（上野）、名古屋城、法隆寺、石山観音（三重県）などの拝観券や入場券が残されているが、観光の際のものであろう。ただし文筆業の観光旅行にしては、行き先が少なすぎるようにも感じる。実際にはもっと各地を訪問していたとすれば、なぜこれらの拝観券だけを残していたのか、気になるところである。

さらに、実際の彼女の日常生活がどのようなものであったかは、複数の著述や関係者の証言、長屋に残されたモノおよび「一般家庭ならあるはずなのに大村宅にはなかったモノ」などから推測することができる。

長屋には風呂はなく、ユニットバスを取り付けるまでの長期間、朝日会館南側の通

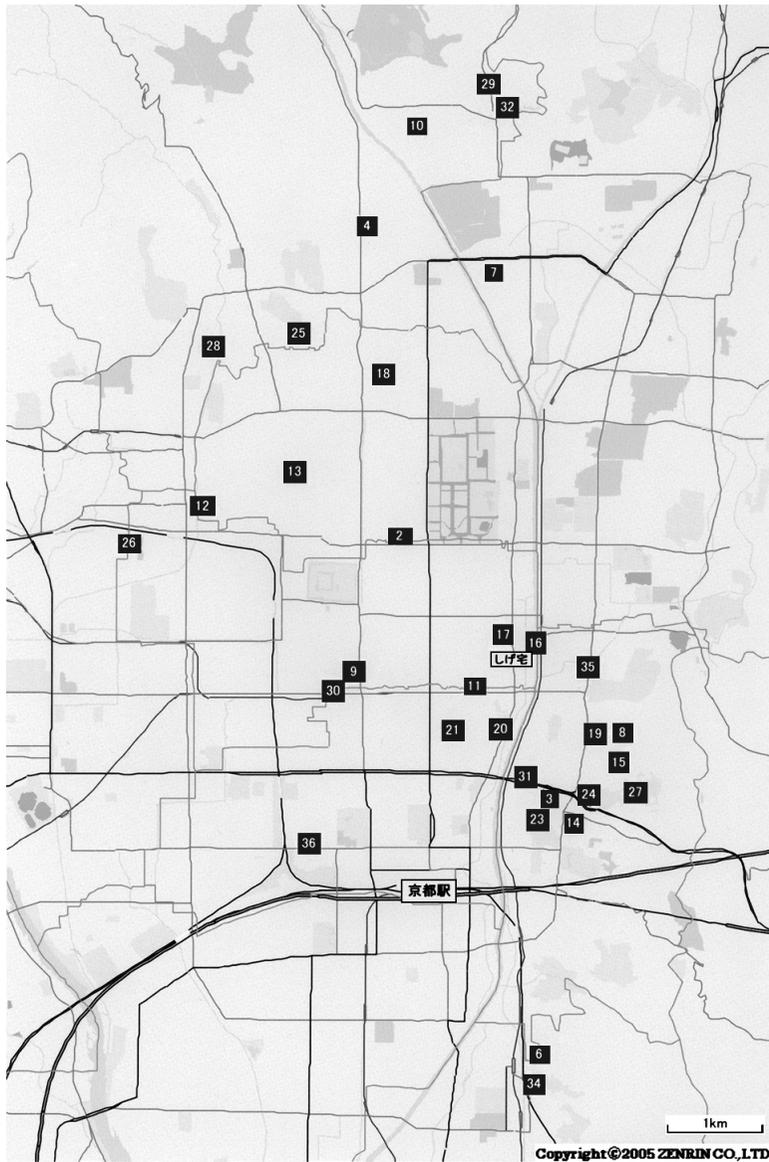


図2 『京の手作り』で紹介された店舗等の分布  
 大村しげ『京の手作り』（講談社 1974）・ゼンリン電子地図帳より筆者が作成

表3 『京の手作り』で紹介された店（寺）リスト

番号	住所	職人	紹介品
1	綴喜郡八幡町高坊九	横川トイ	かんざし
2	京都市上京区西洞院通樺木町上ル	小堀宏一	てまり麩
3	京都市東山区大和大路通五条下ル 2丁目東入ル下梅屋町 137	玉田秋雄	おこぼ
4	京都市北区紫竹東高縄町 5	吉田吉太郎	水ようかん
5	綾部市黒谷町	石角宇一	手漉き和紙
6	京都市東山区本町 22丁目	大西重太郎	伏見人形
7	京都市左京区下鴨貴船町 35	杉山正一	いちまさん
8	京都市東山区祇園下河原	北村信次	椿餅
9	京都市中京区蛸薬師通堀川西入ル	徳田富士雄	しんし
10	京都市北区上賀茂烏帽子垣内町 25	平敷慶秀	型染め
11	京都市中京区錦小路通柳馬場角	山本正二	おぼろこぶ
12	京都市上京区上の下立売御前通西入ル二筋目上ル堀川町	大岡周平	組みひも
13	京都市上京区中立売通千本東入ル田丸町	長岡フサ	つづれ織
14	京都市東山区大和大路通五条下ル上梅屋町 171	西山 幹	打ち出しのなべ
15	京都市東山区清水 3丁目 321	杉足進一	手焼きのおせん
16	京都市中京区三条大橋西詰	内藤利喜松	しゅろぼうき
17	京都市中京区寺町通三条上ル	宮崎ミヨ	晴雨人形
18	京都市上京区寺の内通堀川東入ル	西堀伊三郎	蛇の目傘
19	京都市東山区安井北門通東大路東入ル	田中義雄	葎のすだれ
20	京都市下京区寺町通仏光寺下ル	湯川藤吉	藤工作
21	京都市下京区東洞院通仏光寺下ル	北村利安	豆平糖
22	綴喜郡田辺町字薪 一休寺	田邊宗謙	一休寺納豆
23	京都市東山区大和大路五条下ル 2丁目下梅屋町 149	岩本吉弘	茶碗
24	京都市東山区東大路通五条上ル遊行前町	清水泉州	耳かき
25	京都市北区紫野北舟岡町 40	生源寺治行	京だんす
26	京都市右京区花園北八つ口町 6	辻 千代	とうふ
27	京都市東山区清水新道 1丁目 287	松村敏男	生の菓子
28	京都市北区衣笠北高橋町 18	小林八三	手機
29	京都市北区上賀茂深泥池町 64-45	浪江高治	手猫友禅
30	京都市中京区黒門通錦小路下ル	古我一馬	紋
31	京都市東山区大黒町通五条上ル	寺村喜太郎	扇
32	京都市北区上賀茂深泥池町 79	山田キクエ	すぐき
33	宇治市木幡平尾 28-328	白井彦太郎	ししゅう糸
34	京都市伏見区深草稲荷榎木橋町 30	小西利博	焼いも
35	京都市東山区白川筋古門前上ル	栗田元彦	いかき
36	京都市下京区壬生川通七条上ル夷馬場町 8	辻久次郎	おひつ

大村しげ『京の手作り』（講談社 1974）より筆者が作成、ただし 1, 5, 22, 33 は地図の範囲外

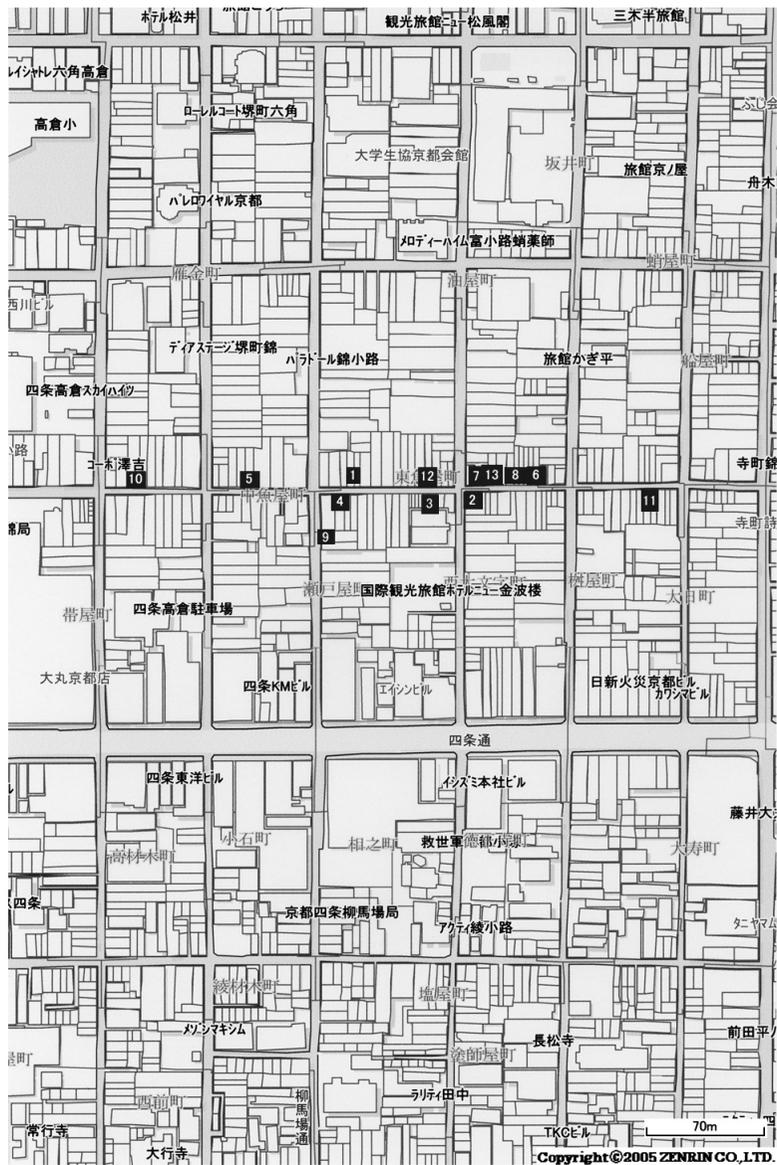


図3 「錦のお買い物ガイド」で紹介された店舗の分布  
 大村しげ『京のおぼんざい』（中央公論社 1996）・ゼンリン電子地図帳より筆者が作成

表4 「錦のお買い物ガイド」で紹介された店舗

番号	品目	店名	住所
1	野菜	池政	柳馬場通東入る
2		川政	富小路東南角
3	塩物と干物	津の友	富小路西入る
4		木源	柳馬場通東入る
5		山市	堺町東入る
6	川魚	馬場	富小路東入る
7	乾物	大友	富小路東入る
8		津の喜	富小路東入る
9	昆布	伊勢久	柳馬場下る
10	鯉節	田邊屋	高倉東入る
11	かまぼこ	七榮	御幸町通西入る
12	出し巻き	三木鶏卵	富小路西入る
13	生麩	近喜	富小路東入る

大村しげ『京のおばんざい』（中央公論社 1996）より筆者が作成。  
場所については図3参照。

りにある銭湯へ行っていた。

1960～1965（昭和35～40）年の間、しげは非常勤嘱託として西陣青年の家に勤務する。まだ普及率が低かったテレビ<sup>25)</sup>を見に集まってきた青年達と親しくなり、仲間をつくっていった。やがて彼女が輪の中心になり、鈴木靖峯氏等と決定的な出会いが生まれる。

京の一般家庭では、来客の折などには市中の料理店から仕出しを取ることが普通に行われており、彼女の家も例外ではなかった。今で言うケータリングサービスである。また、おばんざいの専門家、京料理の研究家という評判を得る一方で、普段の夕食には寺町商店街などでコロッケなど出来合いの惣菜を買って済ませることも多かった。毎日自分で料理をつくる必要がないほど、周囲にはいろいろな都市的サービスや店舗があった。

食事だけでなく、著述や残されたモノをみると衣生活の分野においても、しげの着物を洋服に仕立て直した西陣の杉村町子や祇園の呉服屋など、周囲とのネットワークを活用していたことがわかる。単身であるがゆえに、気楽に衣食住を外部化できていたのである。

### 3.2 情報発信拠点としての長屋

住んでいた住居は本能寺の長屋であったうえに、2階は学生下宿に使用したり、鈴木靖峯氏が寝泊りしたりしていた。もっとも居住性が高いオモテの間も、一時は「手

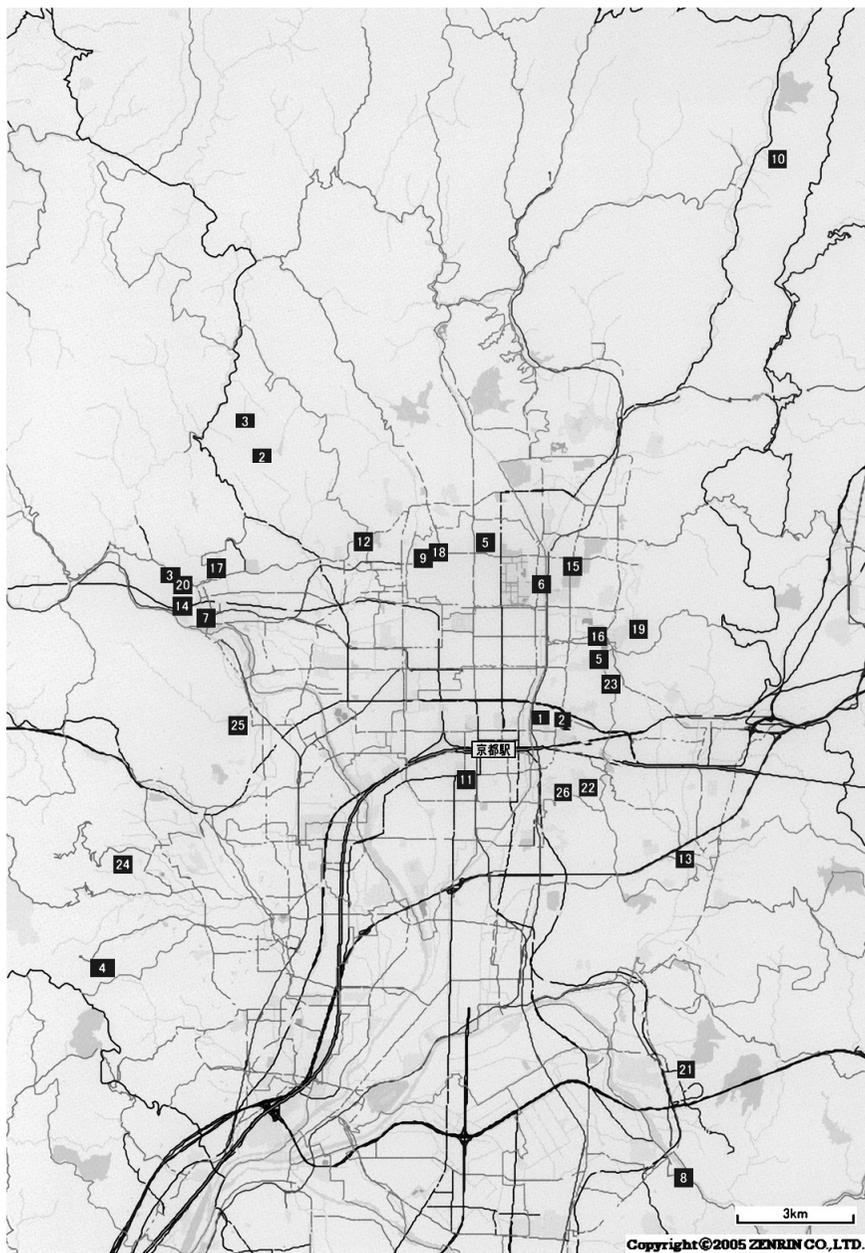


図4 拝観券が保存された社寺などの分布（京都府外を除く）  
 -ゼンリン電子地図帳より筆者が作成

表5 しげが保存していた拝観券・入場券等

番号	場所	住所
1	洛東遺芳館	京都市東山区問屋町通五条下ル西橋町 472
2	河井寛次郎記念館	京都市東山区五条坂鐘鋳町 569
3	化野念仏寺	京都市右京区嵯峨島居本化野
4	善峰寺	京都市西京区大原野小塩町 1372
5	宝鏡寺	京都市上京区寺之内通堀川東入ル
6	紫式部邸宅遺跡（廬山寺）	京都市上京区寺町広小路上ル1丁目北ノ辺町 397
7	天龍寺	京都市右京区嵯峨天龍寺
8	鳳凰堂	宇治市宇治蓮華 116
9	北野天満宮	京都市上京区馬喰町
10	三千院門跡	京都市左京区大原来迎院町 540
11	東寺	京都市南区九条町 1
12	龍安寺	京都市右京区龍安寺御陵下町 13
13	勸修寺	京都市山科区勸修寺仁仁堂町 27-6
14	小倉山常寂光寺	京都市右京区嵯峨小倉山 3
15	思文閣美術館	京都市左京区田中関田町 2-7
16	京都国立近代美術館	京都市左京区岡崎円勝寺町
17	嵯峨御所 大覚寺門跡	京都市右京区嵯峨大沢町 4
18	千本釈迦堂大報恩寺	京都市上京区七本松本通今出川上ル
19	永観堂	京都市左京区永観堂町 48
20	壇林寺	京都市右京区嵯峨島居本小阪町
21	萬福寺	宇治市五ヶ庄三番割 34
22	泉涌寺	京都市東山区泉涌寺山内町 27
23	青蓮院將軍塚大日堂	京都市山科区逗子奥花鳥町 28
24	勝持寺	京都市西京区大原野春日町 1194
25	苔寺	京都市西京区松尾神ヶ谷町
26	東福寺	京都市東山区本町 15-778
京都府外	石山観音	三重県安芸郡芸濃町
京都府外	大原美術館	岡山県倉敷市
京都府外	倉敷民芸館	岡山県倉敷市
京都府外	国立西洋美術館	東京都台東区
京都府外	名古屋城	愛知県名古屋市
京都府外	姫路城	兵庫県姫路市
京都府外	法隆寺	奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺山内 1-1

づくりの店 峰」として使用していた。彼女が単身者だったとは言うものの、実際の居住スペースは決して広いとは言えない。実際、家具の配置や収納の様子、人の動線などをみると、かなり無理をして使っていたようにうかがえる（本書所収 横川公子「大村しげコレクションのもの周辺の周辺」図1-1, 2, 3 参照）。

2階の下宿生が便所に行くには、トオリニワ、ハシリモトを通り、裏口から北側廊下に上がらねばならなかった。裏のユニットバスは下宿生が居なくなった後、青年の家に勤務するようになって、夜分帰宅したときに温まるために入れたものである。

にもかかわらず、ここは料理研究家であり京都文化の専門家である大村しげにとって、替えがたい情報発信拠点であった。ジントギの流しはそのまま使った。父親の家から移設した「おくどさん」は長屋の狭い台所には大きすぎた。後年、消防署から火の使用を禁止されるが、それはなくてはならない舞台装置であり、そばの水屋には取材や撮影の時のみ使う食器が収納されていた。「魚金」の商売用に掘っていた玄関脇の井戸も、京の地下水へのこだわりを示す京料理研究家としての物語性を高める。

彼女の長屋には、入れ替わり立ち代り様々な人が訪れた。朝日会館にあった頃の朝日新聞の京都支局は目と鼻の先。かなり早い時期から朝日新聞の記者がよく出入りし、若い記者に食事を作ってもてなしたこともあるという。こうして彼女と朝日新聞との間には持ちつ持たれつの関係ができあがった。

また、八幡の円福寺の若い修行僧にとって、彼女の家は、京都市内を托鉢にまわる際の恰好の休憩場所となり、食事なども提供された<sup>26)</sup>。おそらくそこでは、街なかを歩き回る修行僧が見聞してきた出来事が語られ、しげにとっては貴重な情報源となったに違いない。後年、修行僧たちが成長し、各地の禅寺へ戻った後もその付き合いは継続した。その縁で、岐阜東光寺に弁天堂を建立し、彼女の両親とともに納骨されることになる。永年続く禅僧とのネットワークも、長屋が接点であった。

接客の場として、掘りごたつが重要な役割を担ったようである。

わたしは、お人さんがお見えになったときも、このおこたに招じて、まずは温まっていた。ただ。 (中略) このおこたは、老師さまと人から呼ばれる高僧から、近所の子たちまで、みんなのだんらんの中で、上も下もないつきあいの場というのは、ほんまに心がなごむ。(中略) 老師さまというても、こちらは雲水さん時代からのお付き合いで (後略)<sup>27)</sup>

父金次郎死去のあと最初の下宿生として3年半にわたって2階に住んだ下宿生Aは、以後生涯にわたって母娘のように交流した。そば菓子処澤正の一家は、しげにそばほうろスティックを考案してもらい繁盛した。脳梗塞で倒れて以降も家族同様一家を挙げて面倒をみた。他にも、しげの文章の朗読をしたNHKアナウンサーの笹谷清子や、「おぼんざい」を共同執筆した平山千鶴、随筆に取り上げられて繁盛したいくつもの店舗も、情報拠点としての長屋のネットワークのたまものといえよう。

ナカノマに設置された電話は、コードを長く伸ばして、オモテやオクノマへも持ち運んだ。後に差し込み式にしたとはいうものの、これでマスコミや友人達と情報のやり取りを行っていた彼女の姿が目には浮かぶ。長いコードの電話とミセの間の掘りごたつこそが、情報発信拠点としての彼女の長屋の象徴ではなかっただろうか。

都心居住の魅力は、職住近接とか、アフターファイブに手軽に映画やコンサート、買物や食事に出かけられること等が指摘されるが、むしろその本質はいろんな人との交流やフェイス・トゥー・フェイスの情報交換が手軽にできることではないだろうか。街や地域との手軽かつ選択的な接点を持つことが都心居住の真の魅力であると考え。しげの住まいは寝泊りの場であるとともに著述業という生業の場であり、今で言う SOHO<sup>28)</sup> の先駆けであった。そう考えれば、狭い空間に必ずしも日常生活に不可欠とはいえないおおびただしい量のモノや、紙類がストックされていたことが理解できる。だからこそ、体が元気な間は、日常生活においては周囲の店や人に頼れるものは頼ってしまうことができたのだろう。

### 3.3 近所の人々とのつきあい

しげは夜に原稿を書くことが多く朝が遅かったので、毎朝かどを掃くのは西隣の隣人 B の役割だった。

それ以外にも、様々な面で隣人 B が面倒を見た。隣人 B は 1944（昭和 19）年から 2000（平成 12）年まで住んでおり、もっとも親しい隣人であった。しげが外出するときは行き先と帰宅予定時間を伝えており、留守中の書留郵便等も印鑑を預けて受け取ってもらった。バリ島に行っている間も留守居役だった。1 回目の脳梗塞の後は大変頼りにされ、朝お茶を入れると夫がしげのところに持っていった。講演会への付き添いなどもした。

隣人 B の娘である C 夫妻とその 2 人の子供一家とも親しく付き合っており、隣人 B の孫娘 D とは毎朝一緒にお茶漬けを食べた。一家がカナダ在住中は手紙のやり取りが頻繁に行われた。

町内会は下本能寺前町と南にある天正寺前町と一緒に組んでいた。下本能寺前町では毎月 1000 円を積み立てて年に 1 回食べ歩きのをした。隣人 B が当番のとき、しげの紹介で峰山の「和久傳」に行った。大変好評だった。モノ書きのネットワークと近隣コミュニティの相互依存関係があった。

こうした付き合いのなかで、下宿生 A 以外の下宿生についての記述は少ない。通算して何名の下宿生がいたのか未確認であるが、狭く濃密な住空間であったにもかかわらず、下宿生とは案外ドライなつきあいだったというのも、都心居住の一側面を示すものである。

## 4 高齢化と都心居住の終焉

階段から落ちて腰を痛め（1992年・しげ74歳）、2回の脳梗塞（1994年・しげ76歳と1997年・しげ79歳）を患うと、培ってきた都心居住スタイルは大きく崩れてしまう。ベッドを入れ、車椅子対応のために敷居を取りカーテンと手すりをつけた。この間、1995（平成7）年1月にはバリ島で療養生活を始め、京都では春、秋の2ヶ月しか暮らさなくなった。SOHOとしての長屋暮らしは実質的にはなくなり、象徴としての住居が残った。

近年高齢化が急速に進むなかで、独居老人のケアのあり方が大きな社会問題化している。その点は大村しげも例外ではなかった。彼女は結局都心居住をあきらめ、バリ島へ向かったのである。留守の間は隣近所の人が家の管理を手伝い、京都に戻っている間は、隣近所はもちろん、執筆活動を通じて知り合った人々には家族のように面倒をみてもらった。

人口減少・高齢化社会の居住モデルとして、「多所居住」という概念がある。複数の住まいを使い分ける技術が必要ということなのだが、彼女の晩年はまさに多所居住者であり、それを支えてきたのが執筆活動で培った、近隣コミュニティとマスコミュニティの両方が作り上げた「擬制的家族ネットワーク」であった。

超高齢社会が到来ししかも単身者世帯が増加する日本の近未来において、誰もが大村しげになることはできない。さて我々はどのようなネットワークを築けばよいのだろうか。

## 注

- 1) しげの知人の証言による。
- 2) 「やめよ“人間闘争”そして水防に工夫を」（朝日新聞1952.7.30）、「公明選挙を語る 各層有識者代表座談会」（朝日新聞京都版1955.1.26）、「石橋総裁をこう思う」（朝日新聞京都版1956.12.15）他多数。
- 3) 「願いは“社会の明朗化”心の底をぶちまけて話合う 今年の主役⑤」（朝日新聞1958.12.22）、「保健所は指導重点に」（朝日新聞家庭欄1962.9.12）他多数。
- 4) 『おばんざい 京の味ごよみ』（中外書房1966）。
- 5) 「関西たべもの散歩」（『くらしの設計』連載1971～1972）や『京の手づくり』（講談社1974）など。
- 6) 「感覚支える暮らし 京文化の厚みがにじむ」（朝日新聞読書欄1981.1.26）。
- 7) 「新春対談 京都に学ぶ手づくりの暮らし」『じゆう』119号早春の号（大蔵屋1981）。
- 8) 『旅行春秋』8（日本交通公社旅行クラブ1980）。
- 9) 『じゆう』116号（大蔵屋1980）。
- 10) 「京のくらしことば」『展望』12巻6号（東海教育研究所1981）。
- 11) 「調査 わたしはこうみた『いけず』親しさの表れ」（朝日新聞1982.3.15）。

- 12) 『しまつとぜいたくの間 ゆたかな暮らしのエコロジー』（佼成出版 1993）。
- 13) 「さりげないあいさつ」（京都新聞お中元広告特集 1986.7.7）。
- 14) 「京のくらし」『みどり』 vol. 2 No. 4（ミドリ十字社 1987）, 「見直してみよう! 始末する暮らし」『読売京都ライフ』（1990.11.19）等。
- 15) 「京のくらし バリにあり」（朝日新聞 1992.6.13 夕刊）。
- 16) 『京暮らし』（暮らしの手帖社 1987）。
- 17) 『ほっこり京ぐらし』（淡交社 1997）。この本は月刊『嵯峨』に 1989（平成元）年 4 月号から 1994（平成 6）年 3 月号まで連載された記事を加筆修正し単行本化したものである。
- 18) 大阪万博の後の旅行需要の沈滞を防ぐために国鉄が仕掛けた、日本初の本格的大規模旅行キャンペーンである。副題であった「美しい日本の私」は川端康成作。
- 19) ディスカバリージャパンの効果が減退したため、1977（昭和 52）年国鉄は「1 枚の切符から」キャンペーンを仕掛ける。さらに翌 1978（昭和 53）年には山口百恵を起用して「いい日旅立ち」がスタートする。
- 20) 上田篤らの町家研究は以下の三部作として上梓されている。『町家・共同研究』（鹿島出版会 1975）, 『京町家・コミュニティ研究』（鹿島出版会 1976）, 『数寄町家・文化研究』（鹿島出版会 1978）。
- 21) 『京町家再生プラン』（京都市 2000）。但し町家の実数調査は 1998（平成 10）年。
- 22) 前掲。
- 23) 『京の手づくり』（講談社 1974）。雑誌『婦人公論』に連載された職人紹介記事を単行本化したもの。
- 24) 「錦のお買い物ガイド」『京のおぼんざい』（中央公論社 1996）。
- 25) 『国民生活白書 平成 7 年度版』（1995）によれば、1960（昭和 35）年における白黒テレビの世帯普及率は 44.7%であった。
- 26) 休息し食事などの接待を受けるところを「点心先」という。
- 27) 「掘りごたつ」『京 暮らしの彩り』（佼成出版 1988）。
- 28) Small Office Home Office の略。都心に立地する事務所を兼ねた小規模住宅のこと。

## 文 献

秋山十三子・大村しげ・平山千鶴

1966 『おぼんざい 京の味ごよみ』神戸：中外書房。

大村しげ

1968 「京のまち」『西陣だより』197, 西陣だより社。

1971-1972 「関西たべもの散歩」『暮らしの設計』, 東京：中央公論社。

1974 『京の手づくり』東京：講談社。

1978 「電車の窓から」『京都の市電』 pp. 122-123, 東京：立風書房。

1980a 「京都の夏のくらしぶり」『じゆう』 116: 10-11, 大蔵屋。

1980b 「京の町と暮らしと」『旅行春秋』 8, 日本交通公社旅行クラブ。

1981a 「新春対談 京都に学ぶ手づくりの暮らし」『じゆう』 119: 23-25, 大蔵屋。

1981b 「京のくらしことば」『展望』 12 (6), 東京：東海教育研究所。

1987 「京のくらし」『みどり』 2 (4): 22-23, ミドリ十字社。

1990 「見直してみよう! 始末する暮らし」『読売京都ライフ』, 大阪：読売新聞大阪本社販売局。

- 1987 『京暮らし』 東京：暮しの手帳社。  
1988 『京 暮らしの彩り』 東京：俊成出版。  
1993 『しまつとぜいたくの間 ゆたかな暮らしのエコロジー』 東京：俊成出版。  
1996 『京のおぼんざい』 東京：中央公論社。  
1997 『ほっこり京ぐらし』 京都：淡交社。

#### 上田篤他

- 1975 『町家・共同研究』 東京：鹿島出版会。  
1976 『京町家・コミュニティ研究』 東京：鹿島出版会。  
1978 『数寄町家・文化研究』 東京：鹿島出版会。

#### 京都市

- 2000 『京町家再生プラン』。

#### 経済企画庁

- 1995 『国民生活白書 平成7年度版』 東京：大蔵省印刷局。

#### 高橋康夫・中川理編

- 2003 『京・まちづくり史』 京都：昭和堂。

#### 新聞記事

##### 大村しげ

- 1952.7.30 「やめよ“人間闘争”そして水防に工夫を」『朝日新聞』。  
1955.1.26 「公明選挙を語る 各層有識者代表座談会」『朝日新聞京都版』。  
1956.12.15 「石橋総裁をこう思う」『朝日新聞京都版』。  
1958.12.22 「願いは“社会の明朗化”心の底をぶちまけて話合う 今年の主役⑤」『朝日新聞』。  
1962.9.12 「保健所は指導重点に」『朝日新聞家庭欄』。  
1981.1.26 「感覚支える暮らし 京文化の厚みがにじむ」『朝日新聞読書欄』。  
1982.3.15 「調査 わたしはこうみた『いけず』親しさの表れ」『朝日新聞』。  
1986.7.7 「さりげないあいさつ」『京都新聞お中元広告特集』。  
1992.6.13 「京のくらし パリにあり」『朝日新聞夕刊』。